

Title	竹田の亦復一楽帖
Sub Title	Das Bilderalbum "Matamataichirakujo" von Chikuden
Author	菅沼, 貞三(Suganuma, Teizo)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1968
Jtitle	哲學 No.53 (1968. 9) ,p.223- 238
JaLC DOI	
Abstract	Chikuden Tanomura (1777-1835), der Verfasser des kleinen Bilderalbums : "Matamataichirakujo", wurde in Chikuden in Mittel-Kyushu, Japan geboren, war am dortigen Hof des Fursten von Oka als konfuzianistischer Gelehrter tätig, schrieb und dichtete, war aber vor allem als Meister des Bunjinga, d. h. als Maler-poet, berühmt. Oft ging er nach Kyoto und befreundete sich dort mit dem bekannten Konfuzianisten, Sanyo Rai (1780-1832). Das Bilderalbum hat eine eigenartige Entstehungsgeschichte : es war namlich eigentlich fur seinen bekannten Arzt, Suiko Matsumoto gedacht Als Sanyo aber gebeten wurde, ein Nachwort dazu zu schreiben, betrachtete er das Album und es beeindruckte ihn so, dass er es nicht mehr zuruckgeben wollte. Chikuden hielt es fur eine Ehre, dass sein Werk diesem hohen Meister gefiel, malte noch drei Bilder hinzu (eines davon, Botan-Blute, ist abgedruckt) und schenkte es neuerdings mit einem langen Vorwort versehen Sanyo Rai. In meinem Beitrag gehe ich unter anderen auf die stilkritische Beurteilung dieses Werkes sowie die Erorterung seines Entstehungsdatums ein.
Notes	守屋謙二先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0229">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000053-0229</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 竹 田 の 亦 復 一 楽 帖

### Das Bilderalbum "Matamataichirakujo" von Chikuden

菅 沼 貞 三

*Teizo Suganuma*

#### Resümee

Chikuden Tanomura (1777-1835), der Verfasser des kleinen Bilderalbums: "Matamataichirakujo", wurde in Chikuden in Mittel-Kyushu, Japan geboren, war am dortigen Hof des Fürsten von Oka als konfuzianistischer Gelehrter tätig, schrieb und dichtete, war aber vor allem als Meister des Bunjinga, d. h. als Maler-poet, berühmt. Oft ging er nach Kyoto und befreundete sich dort mit dem bekannten Konfuzianisten, Sanyo Rai (1780-1832).

Das Bilderalbum hat eine eigenartige Entstehungsgeschichte: es war nämlich eigentlich für seinen bekannten Arzt, Suiko Matsumoto gedacht. Als Sanyo aber gebeten wurde, ein Nachwort dazu zu schreiben, betrachtete er das Album und es beeindruckte ihn so, daß er es nicht mehr zurückgeben wollte. Chikuden hielt es für eine Ehre, daß sein Werk diesem hohen Meister gefiel, malte noch drei Bilder hinzu (eines davon, Botan-Blüte, ist abgedruckt) und schenkte es neuerdings mit einem langen Vorwort versehen Sanyo Rai.

In meinem Beitrag gehe ich unter anderen auf die stilkritische Beurteilung dieses Werkes sowie die Erörterung seines Entstehungsdatums ein.

先ごろ私は江戸時代の後期、文政から天保にかけて、京洛の地で、作陶を善くした青木木米の作画についてしらべてみたことがある。その時気づいたことであるが、木米の芸術の産み出される素因には、同じ時代の京撰の地における文雅の盟友たちの感化が尠くないこと、ことに安芸から京の地に移り住んだ頼山陽と、豊後から度々来往してきた田能村竹田との交友が、深く緊密であったことがわかった。その記念の例証として、私は竹田のかいた「松巒古寺図」をあげて、その図中の自賛に、山陽と木米とが竹田の画を知って愛し、その好尚が相かなっていたと記していることを指摘しておいた。<sup>註1</sup> なおこのうちで、竹田と山陽との二者の交誼について、更に一層緊密な例証として、竹田の筆に成る「亦復一楽帖」こそ、好箇の遺品であることを知り、私はこの画帖を詳しくしらべてみたいと、かねがね念願していた。それが昨年九月、知友の紹介によって、現在寧楽美術館の所蔵にかかるこの稀覯の画帖について、依水園主人中村準佑氏の高配の下に、親しく品鑑する機会に恵まれたので、以下その時の印象の大要を記しておこう。(註1 大和文華 47)

竹田筆亦復一楽帖の大きさは、豎一三纏、横二三・四纏の二つ折の冊子装で、これを見開くと豎二一纏、横二三纏の紙面が二十五面収められている。開帖第一頁には、小竹散人の「亦復一楽」と二行に亘っての墨書がある。小竹散人姓は篠崎名は弼、字は承弼、小竹は其の号で、浪華の人、儒家篠崎三島の養嗣子となり、儒学者にしてまた文章家として知られていたが、嘉永四年(1851)七十一歳で歿した。そうして第二頁から第八頁にわたって、繊細にして遒勁な行書体になる竹田の長文の序(実は跋)が附いている。その末尾に「辛卯中元日」の年記の記入がある。次の第九頁から第十八頁までの十画面と第十九頁から第二十一頁までの三画面が附加されて、計十三面に、竹田特有な書と画とが筆作されているのである。その次

の第二十二頁に、山陽の跋文があり、第二十三頁に山陽門下の宮原節庵、第二十四頁に同藤井竹外、第二十五頁に山中信天翁などの跋文が附加されている。いま更めて第九頁以下の書画図について、視てゆき、これに小解を附すと左の如くである。第一図は崖下の松樹のもと、岸边の斜面に二人の閑人が対坐している。山頂や崖側には薄く岱赭をかけ、淡墨の擦筆で、山峻をあらわしている。松の枝幹は墨描になり、樹皮に赤味をおびた岱赭をおいて、峻鋭な墨描の針葉点のまわりに、淡藍を刷いている。そうして水面は薄藍と淡墨とを交互に用いて波紋を描いている。岸边の斜面の地には淡岱赭、ところどころに藍と白緑の点描を施して、山間静寂の境をあらわしているのである。かくて山頂をめぐる白雲の湧出が、白抜の輪廓線の躍動によって示されている。白雲の悠然たるさまを地上に対坐する白衣と白緑衣の閑人たちが、一人は白雲の彼方を指さし、他の一人は雲の動きを身を反らして眺め入っているのである。図中の題賛に「雲無心而出岫，入亦如此，人之処世能如此，亦復一樂。」（雲無心にして岫を出で、入るも亦此くの如し、人の世に処するも能く此の如くなれば、亦また一樂なり）。と自書して、その傍に白文小題「憲印」が捺してある。冒頭の句は陶淵明の帰去来辞中の詞句に等しく、また本図の山頂に白雲が湧出し、山間の静寂な山辺の状景はどこか、南画の祖、唐詩人王維の「終南別業」の詩句の中「行到水窮処，坐看雲起時」の詩意にかのう構想に則って、作画したのではないか。文人竹田なればこそ、とも想像されるのである。

第二図は月夜の水上に軽舟を泛べ、舟中に坐して吹笛する一人の風流人を描いている。月明に水の光るところは、白抜きのままにし、そのかげに薄墨を刷いて、これに渴筆の墨線で、水波を入れて夜闇のたちこめる水面を、如実にあらわしている。その中で細かい筆先で、むらがる水草の細葉を精写している。平波の水面の一箇処に、まるく月影が宿り、動くともせぬ軽舟の中から、笛の音が伝ってくるごとく、まこと閑寂な水郷の景致が展開されているのである。図上に「水天空濶之処，泛舟与月相上下，不知

身世有所属，亦復一楽。」(水天，空濶の処，舟を泛べて月と相上下し，身の世の属する所あるを知らざるも，亦また一楽なり。)と墨書している。広濶とした水天の，塵外の境に悠然と身をおく画中の人物は，騷人竹田の理想的心境の現われとも首肯されるのである。

第三は題賛に「屏居山中，有素心友来訪，使童子候之門前，亦復一楽。」(山中に屏居し，素心の友の来訪するあり，童子をしてこれを候わしむるも亦また一楽なり。)とある。画面は兀立たる山頂の逼る山間に，ひっそり住み訪友を待ちわびて，童児を門前に窺わしめている。山腹には薄い青墨の擦筆を用い，草家や樹木は淡墨仕立てに岱赭や臙脂を，ごく薄く施している。そうして木々の葉は，中を白抜きにして輪廓を細かく墨描きにしている。全体に淡墨を薄く塗りつつも，ところどころに焦墨を点じて，山間の閑寂境を現わしているのである。恰も竹田が私淑する元の王蒙の筆法に，做うところが仄かに見うけられる。晩秋の木々の色づくころ，山中の草家の楼上の窓辺に，閑人が坐して，小門のうちに童児が彳立しているさまは，竹田の手記「卜夜快語」の中に「今茲に文政紀元十月廿三日，頼山陽東肥より我邑に至り，留ること六日夜」とある文中に「児太一を遣わして，山陽の至るを邀う」という記事が見出されるが，本図をなすに当って，画者は当時を回想して，作画の構想に投じたのではなからうか。而も小門の奥に重層の草家が建つところは，竹田荘の一角が髣髴されるが，背後の山容は実景とは相距ったものではある。

第四図の題賛には「山居四月，雨晴日長，梧桐新引，竹筍初迸，苔色蒙茸，緑陰満庭，与同心友相会，随意快談，稍倦則煮茗温酒，或展観古法書名画，論確古今，鑒別真贋，銷閑遣興，亦復一楽，中郎以朋友為性命有以哉。」(山居四月，雨晴れて日は長く，梧桐新たに引き，竹筍は初めて迸り，苔色は蒙茸として，緑陰は庭に満てり。同心の友と相会し，意に随って快談し，少々倦めば則ち茗を煮て酒を温め，或は古法書や名画を展観して，古今を論確し，真贋を鑑別して，閑を銷し興を遣るも亦また一楽なり。中

郎が朋友を以て、性命となすも以ある哉。) とある。この題賛の意を汲んで、初夏の山中での静居の状景が写し出されている。淡岱緒の藁葺の家屋のうちに、藍衣と白衣をまとう二友が対談している。家屋の背後は、淡藍の竹林によって囲まれ、庭前に薄墨と淡藍をかけた梧桐が二本、水墨描の広葉を繁げらしている。冠木門の柴折戸は薄く岱緒をかけて、両側に開いたままになっている。このように山裾にあって、竹林と梧桐の植った庭先の風致は、現存の竹田荘の庭内を思わせる。而かも題賛の文中の「同心の友と会し快談し、倦めば茶を喫し、酒を汲みかわし、古法書や名画を展覧し、閑暇を楽しむ」というは、竹田荘主人の心境がさながらに、この詩画合作の裡に、髣髴される。

第五図は近景の岸辺に、枝幹に岱緒をおく三本の樹木が生え、そのいずれの樹にも、白描の寄生木が纏わり付いている。これらの木の間を透して、一葦の苦舟が泛び、舟中に白衣の閑人が一人安坐している。樹木と苦屋と人物の肉身に、薄く岱緒をおく外は、すべて淡焦の墨描を駆使して、晩秋寂莫とした江上の風景を写しとっているのである。そうして図上には「秋晩樹老、水落沙浅、駕一葉之輕舟、独往自適、亦復一樂。」(秋は晩く樹は老い、水は落ち沙は浅し、一葉の輕舟に駕して、独り往いて自適するも亦また一樂なり。) と墨書している。本図の題賛の意と画境との一致したところは、さきの第三図と同様に、塵外の世に超俗の身を処せんとする作者その人の理想の境を、この詩画中に仮託して示したものである。

第六図は湖畔の樹陰に二棟の家が建って、対岸の真向に山頂が、相對して聳え、その山と山との谷間に尖塔が高く建っている。これらはすべて淡焦の墨描を主体として、図写されているが、山肌に薄く岱緒を施し、樹木の葉には丹や臙脂を混じて、紅葉のさまを現らわしている。而も空には暗雲がとざし、湖の面には暗闇が逼って、樹木の伏し騒ぐさまは、風雨のすさぶ晩秋薄暮の景觀を示現している。かかるとき門を鎖ざして、家屋のうちにあって、家族の団欒しているさまが、写し出されているのである。図

## 竹田の亦復一楽帖

中の賛に「風雨夕掩門不出，妻孥環坐温酒，同醉歡笑達旦，亦復一楽。」（風雨の夕，門を掩うて出でず，妻孥は環坐して酒を温め，同じく酔うて歡笑し且に達するも，亦また一楽なり。）と墨書している。本図の景致は湖畔であり，詩人の空想の理想境を写しつつ，家屋内は画者の家庭団欒の生活環境を写したものであろうか。これとてもまた筆者の理想とする境涯を示したものであろうか。

第七図の題賛には「世以順風張帆為快事，従我豊三叉港至浪華府，一千五百里，予以本月朔上舟，二日夜抵兵庫港，両昼夜間走一千四百里舟中乃置酒賦詩，末云，千五百程唯兩日，酒瓢猶沸乙津香，行旅如此，亦復一楽。」（世順風に帆を張るを以て快事とす，我が豊の三叉港より浪華府に至る，一千五百里なり，予は本月朔を以て舟に上り，二日の夜兵庫港に至る，両昼夜の間に千四百里を走る。舟中乃ち酒を置いて詩を賦す，末に云う千五百程唯兩日，酒瓢なお沸く乙津の香，行旅此の如きも，亦また一楽なり。）とあるように，竹田が豊後の三浜から浪華に向う海路一千五百里（シナ里程）を航する時，順風に帆を張って，さざ波の立つ洋上を走る，荷足船と此岸に生うる樹木の風に揺れ動くさまが，写し出されているのである。

鱸におく屋形の覆蓋に，臙脂まじりの淡岱赭を彩すると，此岸の樹木の幹や紅葉に岱赭をおく外は，樹葉も船も帆の輪廓も波も，すべて淡焦の墨描になる。さざ波は細かく渴筆を用いて，よくその波動のさまを写し，樹木の葉は潤墨を用いて，墨色の佳調を示現しているのである。この図は画者の脳裏に刻まれた，瀬戸内海の光景を筆写したものであろう。

第八図は「把盃卓立於長風前，胷間無一物之為芥蒂，目下無一塵之為点汚超出於万象之外，忘吾之為我，亦復一楽。」（盃を把って長風の前に卓立すれば，胸間に一物の芥蒂をなすなく，目下には一塵の点汚をなすなし，万象の外に超出して，吾の我たるを忘るゝも，亦また一楽。）なりという題賛の意を汲んで，画面の中央に，一人の高士が盃を把って，その胸間には一物の心のさわりもなく，洒然としてつき立っている。そうして淡墨に

淡岱赭を施した広口の甕の傍に、片手に水瓶をもち、片手に柄杓をとって、甕中の酒を汲まんとする童児が一人、ちよこなんと坐している。高士の肉身は淡岱赭色、眉目のまわりに、薄く丹紅色の隈取あるは、微醺をおびたさまをあらわしたのであろう。手に把る盃は白緑の色、童児の肉身は丹と岱赭を薄く、柄杓も水瓶もともに白緑の彩色をともなっている。かくてこの高士も童児も、中国人物の風姿を移写せんとする意企が見受けられるのである。

第九図は芭蕉の広葉を重ねた上に枕して、安臥する閑人が午睡するさまを描出している。芭蕉は墨描になり、人物の肉身は淡岱赭に淡紅色を混じて、これに淡墨の隈取を施している。短い軽衣を纏うているので、鼓腹の臍があらわに見られる。片手に芭蕉団扇を持ち、片手を頭のうしろにまわして、枕には白緑を彩し、白い軽衣の裾には、白緑の布靴をはいた両の足先が見えている。冷え々々とした芭蕉の広葉の上に、軽衣も涼しげに、昏睡する人物は、いかにも塵外の境にいて、日々を悠々然と消光しているかに、写し出されているのである。

画上に墨書する題賛に「有目而無所睹，有耳而無所聽，有鼻有舌而無所分五声香臭弁辛酸，五官備而無為，混然与天地参而無間隔，生干晚近之世而処於陰陽未判之初，在夫唯一睡眠之間為然也，是亦一樂。」（目ありて睹るところなく，耳ありて聴くところなく，鼻あり舌ありて，五声香臭を分ち，辛酸を弁ずるところなく，五官備わりて為すなく，混然として天地と参じて間隔なし，晚近の世に生れて，陰陽未だ判ぜざるの初に処するに，夫れ唯一睡眠の間に在りて然るとなすなり，これ亦一樂）とある。

現在の竹田荘の庭前において、盛夏の頃は、瑞々しい広葉を繁茂する芭蕉の数株が植っている。竹田在世の当時もかくあったか不明であるが、広葉の芭蕉を重ねた上で、午睡する人物は、竹田荘主人ではなく、その憧憬の明清人を髣髴さすのである。

第十図は高士が端坐して、鞘を放った白刃を面前に、真直ぐに立てて持



ち、これを息をとめて凝視するさまを描出している。肉身は淡袋赭に薄い褐色の隈をおき、髻を白緑の小布で巻き包み、これに鎗を刺している。身には白衣をまとい、その衣褶は淡墨描になるが、襟や袖口には白緑を彩している。白刃には反りがなく、中国製の古宝剣を思わせる直刀が墨描されている。

題賛には「観古宝剣，誦鎗又詩，心胷爽快，亦復一楽，又詩云古時一条水，向我手心流，今日脱相贈，莫酬瑣細髻。」（古宝剣を觀じつつ，鎗又の詩を誦すれば，心胸爽快にして，亦また一楽なり。又詩に云う，古時一条の水，我手心に向って流れる，今日脱し相贈る，瑣細の髻に酬ゆること莫し）と，他に比してやゝ太目の文字で墨書している。

この第十図も，また前記の第八，第九図中にみるように，明清人の風姿を以て描出している。当時のわが文人や画家の嗜好において，中国文化の精華に憧憬するのあまり，作画の構想において，またその題賛を書すのにも，敢て漢文体を用いて，ひたすら明清に倣うとする風潮が示めされているのである。

## 二

以上十図は竹田が大坂の医師，松本酔古のために筆作し，自身では之を雑画冊と称して，その跋文を頼山陽に請うたのである。山陽の跋（漢文）には左のごとく記している。「行家の画を作って，活を為すもの，草々に局を結ばんことを要し，氣力到らざる処多し，吾が君彝は則ち然らず，小幅矮冊も委曲綿密にす，想うにその筆を点じ，墨をやるに，方に一頁を作るや，また一頁あるを知らず，亦復一楽なり。山陽外史襄識。」と。なお「君彝此冊を持ち来りて，以て余に一跋を索む，余これを机間に置いて，時に出して展観しつつ，其愛す可きを覚え，遂に奪って我が有と為す，亦復一楽也。襄再識」と追記している。

また竹田はその自跋（漢文）において，冒頭に次のように記している。

「余、資性迂濶にして、絵事を僻愛し、苦辛従事すること殆んど五十歳、這裡の消息、知る者は子成一人のみなり。故に平生称して、画中の知己第一と為すなり。」と。なおこの竹田自跋の文中に、山陽を讃える語句が随処に見出される。次にこれを抜萃すれば、左記するごとくである。

「子成は儒にして、六法を解するものなり。」とも「子成の鑒別するところ、来歴ありて各々肯綮を得て、漫然たるに非ざるなり。」また「余、画を作る毎に、子成を得て品評に与ることを憶う。」とあり、また「蓋し平生高尚の志、書卷の気紙上に溢出して、掩抑すべからざるなり。」ともある。また殊に「余の子成に拳々たるは、其の言語文字の前人の未だ書き到らざる所を以てなり。子成の余に拳々たるは、其の点染位置の前人の未だ写し到らざる所を、写し到るを以てなり。」などとも記している。このように、竹田が山陽に対する信望の情まことに甚大なることが、知られるが、なおこの自跋の末尾の文中に「子成の執意甚だ確く、己の欲するところは、人の与えざるも亦必ず取る。己の欲せざる所は、人の与うるも亦敢えて取らざるなり。此の冊の如きは、当時之を出し示すに方りて、已に取らんと欲する意、眉間に動けるあり、故に敢えて奮まずして、一時に輟贈せり。然も唯だ敢えて奮まざりしのみならず、自ら此冊の其所を得たるを喜ぶと云う。」とさえ記しているのである。

かくて竹田は本画冊を、山陽が奪取したことを、文字通りに喜んでいるのみか、この雑画冊十頁に、更に精魂をこめて描成した三図を加えて、山陽のもとに贈ったのである。その間の消息についても、竹田は自跋の文中に、次のごとく記している。「余が子成の家に寓せしこと数日、一日子成早く起きて、書堂を掃除し、花を挿し香を焚き、壁に呉春坡の山水幅を挂げ、自ら鴨水を汲んで、之を古盞甕に貯え、古端研を洗い、程氏墨を磨り、筆紙を陳ぶ。並に平日愛蔵して妄に用いざる者を添う。其他研屏、筆架の属、悉くここに称えり。以上数件を一々手ずから辨じて、敢えて童婢を指使せず、既にして畢り、余に揖して曰う、今朝の供養結構此の如し、請う

吾が為に画れよ。余即ち白描の蘭竹、没骨の牡丹及び草筆の水僊煤花三頁を作る。今冊中収むるところ是なり。昔、危大僕、袁清容輩の大癡、雲林を待つ在りしも、亦恐らく是に過ぎる能わざりしならん、姑く録して辱知の渥きを記すと云う」とある。

このようにして成る、追加三図中の第一図は、蘭花と細竹とを、精緻な白描体の筆致で描写している。而も尖鋭な線描で葉脈を細かく描いて、蘭竹ともにその細葉を交差しつつも、その間に乱れるところなく、整然と各の生態を活写している。図上に左のごとき題賛が、これまた繊細な筆法をもって、精細に墨書されている。

「孟子之正，左氏之文，蒙莊之奇，一時鼎峙立不朽之言，屈子離騷參立其間，日月爭光，擒辭藻麗用意悽惋，使人諷誦不能止，古人以飲酒讀騷為名士，余用白描法寫此，再把離騷讀一過雖不能為名士亦復一樂。」（孟子の正，左氏の文，蒙莊の奇，一時に鼎峙して不朽の言を立つ，屈子の離騷，その間に参立して，日月光を争ひ，辞を擒えて藻麗，意を用いて悽惋なり，人をして諷誦止む能はざらしむ。古人は酒を飲み，騷を読むを以て名士と為る。余は白描法を用いて此を写し，再び離騷を把って，読むこと一過，未だ名士と為る能はざると雖も亦また一楽なり。）とある。

本図は既記したごとく、あとの二図とともに、特に山陽のために、謹細な筆を駆使して描成したもので、殊に題材に蘭竹を撰んだのは、山陽との交友において、蘭契にして清節なることを、誇示したとも思われる。

次の追加第二図は、艶麗目を奪うばかりの色彩を施して、一枝の牡丹花の馥郁、匂うばかりに描成したものである。題賛に記すように、正に唐人の傾国とまでうたわれる富貴清艶の花王を写すに、花卉の部分は付け立描法をもって胡粉、薄臙脂、濃臙脂とその色彩の段階を重ねて、薬には雌黄の点描を入れて、丹念に仕上げている。それと葉にあっては表面は藍色、裏面には白緑を彩して、花に沿う嫩葉には臙脂色、また枝葉には濃藍の細筆を用いて、葉脈を細写している。そうして枝莖は勾勒法によって、伸び

のある線描で括っているのである。

その題賛に「唐人有句咏牡丹曰。若教解語当傾国，此句言其明麗豊艶尽矣，而世有花之能解語，動人傾国者寔繁，吾輩捨彼取此，餅頭挿置，終日対賞亦復一楽，蓋特以其不解語也。」(唐人句あり，牡丹を咏じていう。若し語を解ししむれば，当に国を傾くべし。此の句，其の明麗豊艶を言い尽せり。而も世，花の能く語を解し，人を動かし国を傾くもの有り寔に繁し，吾輩彼を捨てて此を取り，餅頭挿置して，終日対賞するも亦また一楽なり。蓋し特に其の語を解せざるを以てなり。)とある。(原色牡丹図参照)

追加の第三図は，古木の白梅一枝に，二株の水仙を配して，ともに淡焦の墨描をもって表現しているのである。梅も水仙もともにその花蕾をあらわすのに，簡約の草筆を用いつつも，形象が如実に写されている。殊に梅枝の淡濃の墨調は，画者特有の細心鏤刻の描法に終始している。而して図中の上下に分れて，次の如く題賛が墨書されている。

「山陽頼子嘗語予曰，連年著述成績多在梅花水僊之時，若通議楽府六十六関類皆是，蓋此時也歳時將除風雪雜至，人家多事，門無過客，家居清適，研北方挿此二物，幽人得意無過此際，故使然也，斯言極韻聞此亦復一楽為作。」(山陽頼子，嘗て予に語って曰う，連年著述の成績は，多く梅花水僊の時に在り，通議楽府六十六関の類の若きは皆是なり。蓋しこの時また歳時の將に除せんとして，風雪雜わり至り，人家は多事，門に過客なくして，家居清適なり。研北まさにこの二物を挿す，幽人の得意，この際に過ぐるはなし，故に然らしむるなり。斯の言極めて韻にして，これを聞くことも亦また一楽，作ると為す。)

これら追加の三図を描成するに当り，山陽がこの画友を敬愛するあまり，細心の配慮をもってのぞみ，いかに手厚く遇したかは既記したごとくであるが，竹田も亦この辱知の友の芳情に酬ゆるに，畢生の努力を惜しまなかったことが窺われる。就中「牡丹図」のごときは，本画帖中の圧巻たるばかりか，竹田の数ある遺作中においても，屈指の名作たることも，偶

然に生れたものでないことが、しみじみと窺知されるのである。

三

さてこの画帖を通観して、筆者竹田の意企する構想は那邊にあったのであろうか。化政から天保期のわが文人画家たちの作画の構成には、明清文化の吸収と、これを咀嚼していかに中国風に再現し得るかという点に、苦心のあとが偲ばれる。竹田にあってはこの点において、他を絶した努力が払われていたことが窺われる。これはその作画の範囲にかぎらず、その詩書においても同様に刻苦したあとがうかがわれる。いはば明清の文人画に示されているごとき、書画一致の佳境に達することが、その作画構成の意企に作用していたことが、既記したごとくに、随処に認められるのである。

それと竹田の閲歴をみれば、三十年代において、既に藩務から退いて、専ら文雅の道にいそしんでいたことが知られるように、竹田の常念の思惟には、塵世から韜晦せんとする高邁な精神が、作用していたこともまた看過しがたいのである。

なお本画帖の各図に見られるように、画面構成における周到な留意と、細心な筆描と簡約された賦彩の妙に心うたれる。同時に各画中に墨書された題賛の文字が、極めて繊細にして遒勁な筆力を有し、その細字の配列もまた整備して、その清麗淡彩な作画と渾然一体をなす高雅な趣致にわれわれは強く心うたれる。

而して図中各題賛の末尾に捺印されている、白文小顆の「憲印」は、「竹田印譜」によれば、「鈕は天然石の璧、松本黄鶯篆」とあるもので、また竹田の「印譜識語」には「予の蔵するところ尽く游印に係る。名を刻するもの僅々にして、是の小石のみなり。亦黄鶯の刀」とあるも、この小印についての自解と考定される。

次にこの画帖のうち、竹田が自ら雑画冊と称した十図と追加三図は、何

れの時、何れの処において筆作されたものであるか。以下これについて、いささか考察をめぐらしておこう。

本画帖の竹田の自跋の末尾に「辛卯中元日、書於竹田莊之補拙廬、盆中茉莉結萼九、是日放其二、蓋吾邑多寒貯此花者甚希。」竹田生憲、白文小頼「憲印」二重楕円廓朱文印「竹田」とある。辛卯中元は即ち天保二年七月十五日、この日竹田莊の補拙廬に於て、この跋を書いた。あたかも盆中の茉莉花が九ツ萼を結んだのが、この日二つ咲いた。わが豊後竹田の里は、寒冷の日が多く、此花を貯えること甚だ希れであると結んでいる。このように、竹田がその長文の跋を書き上げのは、天保二年（1831）の七月十五日であったが、作画及び題賛の成ったのは、前年の天保元年（1830）十二月中のことと推考される。

すなわち本画帖第七図の題賛中に「我が豊の三叉港より、浪華に至る一千五百里なり。予は本月朔を以て舟に上り、二日の夜兵庫港に抵る。」とあるが、竹田年譜を閲みすると、天保元年（竹田五十四歳）十二月朔に、竹田は弟子の草坪と瘦仙とを伴って、豊後三浜から海路浪華に向い、同月二日夜兵庫港に着き、同三日に大坂に入ったことが知られる。なお「竹田日譜」には、天保元年十二月二十二日に京に入り、同二十四日に頼山陽を訪ねて、この雑画冊を示して、跋を請うていることが知られる。これによって雑画冊十頁の完成されたのは、天保元年十二月三日以降同二十二日に至る、大坂滞留中に於て、と推考される。而して追加三図の筆成されたのは、同年十二月二十四日以後、竹田が山陽のもとに、滞在中のことと推考される。

乃ち竹田自跋の文中に「余が子成の家に寓せしこと数日、一日子成早く起きて、書堂を掃除し云々」と追加の三図を筆成した記事があること、既記したごとくである。ただその日時について、頼山陽詩集について、較べてみると、天保元年十二月廿四日付の「君彝来訪、二首」と題する作詩。

竹田の亦復一楽帖

掃榻留君宿	榻を掃って君を留めて宿す
永夜同灯燭	永夜灯燭を同うす
君坐読我詩	君は坐して我詩を読み
我臥眠還覚	我は臥して眠り還た覚む
衰惰猶故吾	衰惰なお故吾なり
煩君細評駁	君を煩らわして細評駁す
瓶中水僊花	瓶中の水仙花
夜久亦吐萼	夜久しうして亦萼を吐く。

なお同じく十二月三十日付の「除夕，君彝来，同守歳」と題する作詩。

当我相思夕	我が相思の夕に当り
知君来宿心	君来宿の心を知る
孤灯歳共守	孤灯の歳共に守る
両鬢霜同侵	両鬢の霜同じく侵す
郷土粉榆遠	郷土粉榆は遠く
京城鐘漏深	京城の鐘漏は深し
較存慈母在	較に慈母存する在り
関意信浮沈	関意して浮沈に信す。

なおまた天保二年一月十七日付の「上元後二日，君彝再来宿，明日将下江也」と題する作詩

垂垂燭淚照煤花	垂々たる燭淚は梅花を照す
忽別心情乱如麻	忽別の心情乱れて麻の如し
猶幸相逢慰平昔	なお幸に相逢うて平昔を慰めん
兩旬三度宿吾家	兩旬三度吾家に宿る。

以上三首の山陽の詩によって、天保元年十二月廿四日から翌天保二年一月十七日までの兩旬の間に、竹田が山陽の家（水西草堂）を訪れたこと、除夜と合せて三度止宿したことが知られる。

また竹田日譜によれば、除夜に山陽家に止宿した竹田は、その翌元旦には、小石櫻園の用拙居に還っている。而して同じく一月十七日に三度、山陽家に止宿した竹田は、既記山陽の作詩の題に示すように、その翌日に、江を下って大阪に向った。それ故に、竹田が日を重ねて頼家に滞留したのは、天保元年十二月廿四日直後の数日が想定されるのである。この期間に山陽は、本画帖の跋文を筆し、之を奪って己の有とし、竹田は山陽の懇懇するままに、草筆の梅花水仙と没骨の牡丹花と白描の蘭竹の三図を追加描成したことが推考されるのである。

なおまた山陽が篠崎小竹に題僉と、合せて小竹を介して本画帖の装幀方をも依頼した。その時に当って、山陽は竹田自身の跋文を草することを頼んだのである。その跋文の督促が、竹田のもとへ届かぬ先に、天保二年七月十五日に既記したごとく竹田が長文の自跋を草したのである。而して、本画帖を装幀するに当って、山陽はこの竹田の跋を最初の小竹の題僉の次に、恰かも序文のごとくに、前置したばかりか、竹田の作画の配列の異同をも敢えて決行したものと想像される。試みに竹田著の「自画題語」をみると、左のごとく相異が見出される。まず題賛の頭初の句或は追加の画題とを、自画題語の順序をカッコ内の番号(現形)と照合して示すと、左の通りである。

- |                  |                 |
|------------------|-----------------|
| 一，屏居山中(三)        | 二，山居四月(四)       |
| 三，水天空濶(二)        | 四，秋晚樹老(五)       |
| 五，風雨夕掩門(六)       | 六，雲無心(一)        |
| 七，有目而無所覩(九)      | 八，觀古宝劍(一〇)      |
| 九，世以順風(七)        | 一〇，盃卓立(八)       |
| 一一，(追加一)梅花水仙(一三) | 一二，(追加二)牡丹花(一二) |
| 一三，(追加三)蘭竹(一一)   |                 |

以上のごとき異同について、竹田ははじめ、自画題語に示す順次に、作成したものかと推せられる。而して画帖の装幀の成るに及んで、自跋を草



## 竹田の亦復一楽帖

した時には、追加三図について、山陽の好みによって撰定した異同の順次に改めて、追加第一に蘭竹をおき、第二に牡丹花、第三に梅花水仙をおいて、自跋に記入しているのである。

なお竹田は既記したように、この画帖をはじめ「雑画冊」と称したが、画中第一の知己たる山陽によって、小竹の題僉の示すごとく「亦復一楽」と改称せられて、いよいよその真価を発輝するに至ったのである。

最後にこの画帖の後跋、節庵、竹外及び信天翁等の文によれば、この画帖が山陽のもとを離れて、弟子の村瀬藤城に移り、藤城の歿後は、その弟の秋水の有となった。その時外函を造って、管表に「豊後竹田先生画冊一帖、山陽先生所贈也、秋水書屋珍藏」と書し、これを嗣子雲峽に伝えた。其の後田近竹村という京都画家の所有するところとなり、その没後大正十二年春の入札売立で、東京の本山豊実氏が万金を投じて入手した。同年九月一日の関東大震災の時、本山氏は此の画帖を懐にして遁れ、田端駅の空列車の一室で、これを守って夜を明したという。このように生命をかけて、守りぬいた至宝はその後神戸拳一氏の有となり、のち松本雙軒庵が所有したが、現在は寧楽美術館の依水園主人中都準佑氏の秘庫に収められているのである。

(附記) 図版の竹田筆「牡丹図」(原色)は寧楽美術館長の御承認を得て、講談社所有の写真原版により、便利堂印刷技師が精製したものである。記して各位の厚意を深謝する次第である。